

自閉症スペクトラム障害者の発話における交渉詞 「ね」と「よ」の使用から検証する対人観

加藤 澄*

The Interpersonal Perspective of Individuals with Autism Spectrum Disorder Reviewed from Their Use of the Negotiators “Ne” and “Yo”

Sumi KATO*

This study investigated the interpersonal perspective of individuals with autism spectrum disorder (ASD) by observing their use of the negotiators “ne” and “yo.” The underlying concept of this study is that these negotiators are chosen by individual speakers to assess hearer’s understanding and to confirm hearer’s thoughts and opinions as well as to indicate the speaker’s agreeing attitude to the hearer. Therefore, negotiator usage reflects an individual’s interpersonal perspective during linguistic interaction.

Fifteen autistic subjects, who ranged in age from late adolescence to adults in their early twenties, and fifteen typically developed counterparts were interviewed via a questionnaire asking about family, daily life, future plans, and so forth. The statistical data showed that the autistic subjects, compared to the typically developed individuals, made significantly less use of the negotiator, “ne.” Concerning “yo,” although the mean value of the control group was higher than that of the ASD group, the difference was not significant.

These findings are discussed in relation to the joint-attention as well as the theory-of-mind hypotheses of autism. The negotiators “ne” and “yo” are thought to represent joint attention in the form of verbalization. The deficit in empathy has been cited as a central characteristic of ASD. From these findings it is highly probable that individuals with ASD are deficient in the capacity to represent some aspects of the internal psychological processes of others, with this deficiency having its roots in their early stages of cognitive development.

1. 目 的

2013年に改訂されたDSM-5で、DSM-Ⅲ以来の発達障害を示す定義が変わり、自閉症障害・小児期崩壊性障害・アスペルガー障害・特定不能の広汎性発達障害を包括して自閉症スペクトラム障害 (Autism Spectrum Disorder, 以後 ASD と略記する) というカテゴリーで一括りにされた。その診断基準としては、(1) 社会的コミュニケーション及び相互関係における持続的障害、(2) 限定された反復する様式の行動・興味・活動があげられる (森・杉山・岩田, 2014)。そのうち (1) が示すものは、(i) 社会的、情緒的な相互関係の障害、(ii) 非言語的コミュニケーションの障害、(iii) 関係性の発達・維持の障害である (森・杉山・岩田, 2014) (加藤, 2017)。

* 青森中央学院大学経営法学部教授

自閉症のコミュニケーション障害とは、社会性の障害・想像力の障害と同じ基盤を持ったコミュニケーションの障害である（杉山，2004）。杉山は、「語用論的障害とは、社会性の障害に直結するものであり、非言語的コミュニケーションを含むコミュニケーション全体における間主観的機能の障害としてまとめることができる」（杉山，2004：13）としている。言い換えれば、「自閉症における意味論的な問題も統語論的な問題も、自閉症の中心である社会性の障害の上に言語機能が発達をした姿である」（杉山，2004：13）と考えられる。

本研究では、ASD 者の発話の中で、交渉詞の使用に着目し、これらの障害が定型発達者と比べて、どのような特徴を備える傾向があるか、そしてその特徴には、ASD 者のどのような本質的機能障害が根底にあるのかを探る。「ね」の使用状況を調べた研究に関しては、綿巻（1997）があるが、こちらは ASD 児について調べたもので、本研究では、言語習得臨界期をはるかに過ぎた 17 歳から 20 代はじめにかけての ASD 者が対象となる。綿巻（1997）は、ASD 児 1 名と精神遅滞児 1 名を比較した事例研究で、ASD 児には、「ね」が観察されず、一方、精神遅滞児では高頻度で観察されたことを報告している。

分析は、Halliday による選択体系機能言語学（Systemic Functional Linguistics；以後 SFL と略記する）の理論的枠組みに拠る。SFL は社会的脈絡の中で発話されるあらゆるテキストを対象に、記号体系の 1 つとしての言語を媒体として、どのような意味交換がなされているかを探ることを目的として構築された言語理論である。SFL では、言語とは何より意味の体系であり、形式は意味をどう伝えるかによって選択されるというのが、基底概念となる。SFL は、機能主義（functionalism）に立つもので、発話・文を一方向からではなく、（1）観念構成的、（2）対人的、（3）テキスト形成的メタ機能という 3 つのメタ機能の側面から、重層的に分析する言語理論である。観念構成的メタ機能とは、人間の経験を解釈し、外的、内的現実を説明、解釈するための意味選択網であり、対人的メタ機能は、対人的相互作用における話し手の発話役割、心的姿勢を表出する機能を担う意味選択網で、テキスト形成的メタ機能は、言語行動としてのテキスト全体の首尾一貫性を構成するための仕組みを扱う意味選択網である。本研究では、ASD 者の診断基準から、対人的コミュニケーションの障害を主訴とする点に鑑みて、ASD 者の発話の中に現れる交渉詞「ね」と「よ」の使用頻度を計量し、提言と命題、態度、位置あるいは地位、関与が交渉される交換（exchange）上、どのような特異な点が発現するのかを、定型発達者との比較を通して議論する。

2. 交渉詞の理論的枠組み

メイナード（1993）は、日本人 20 組について、各 60 分の日常会話について調べ、その文末表現を計量している。表 1 がその数値である。これを見ると終助詞が圧倒的に多いことがわかる。

日本語による対話では、終助詞抜きに話をするとは相当奇異な発話になると言える。終助詞とは、「ね」「よ」「の」「な」などの文末詞のことで、Teruya（2006）は、対人的相互作用において、交渉に直接的に働きかける対人的機能を持つことから、「交渉詞」と命名している。例えば、「～します」とあれば、叙述文となり単なる陳述である。しかし、これに「ね」をつけて「～しますね」とすると、途端に対人間の交渉モードになる。この意味で、Teruya の命名はまさに言いえていえる。時枝（1951）はすでに、終助詞を対人関係の構成という観点から捉えることで、その機能を明らかにできるとし、終助詞が助詞、助動詞の意味として捉えられてきたことを批判してい

表 1 日本人 20 組計 60 分の日常会話に見られる文末表現

文末表現	頻度	総数に占める割合 (%)
終助詞	436	35.05
体言止め	204	16.4
「じゃない」「でしょ (う)」などの助動詞	121	9.73
動詞現在形	103	8.28
動詞の「～て形」	93	7.48
接続詞	70	5.63
副詞句	69	5.55
格助詞	47	3.78
動詞過去形	46	3.7
言いよどみの類	42	3.38
「わけ」「もの」などの形式名詞	13	1.05
総数	1,244	100.00

(メイナード, 1993 : 120)

表 2 交渉詞の組み合わせと機能

		2									
発話機能 negotiator		確認・友好性	確認	主張・強調	柔らかな主張	断定	強い主張	共感	質問	質問	投射
		ね	な	よ	わ	さ	ぜ	の	か	の	と
1	確認・友好性	ね									
	確認	な									
	主張・強調	よ	よね	よな							
	柔らかな主張	わ	わね		わよ・わよね						
	断定	さ									
	強い主張	ぜ									
	共感	の	のね		のよ・のよね	のさ					
	質問	か・かい	かね	かな	かよ			の・か (かい)			
	質問	の		(な) の							
	投射	と									

(Teruya, 2007)

る。こうした見地から、本研究でも、終助詞を改め、Teruya の捉え方を採り、交渉詞と呼ぶ (加藤, 2016 a)。

交渉詞は単独で用いられる他に、他の交渉詞との組み合わせで用いられる場合も多い。表 2 は、Teruya (2007) より、組み合わせ例と発話機能を入れたりリストである。

日本語文化では、相手とどのような関係を結ぶかに応じて、交渉詞が使い分けられる。これを対人的相互作用の文脈で考えると、話し手が聞き手との距離を詰めるのか、あるいは距離を置く方がよいのか、相互作用の局面に応じて、聞き手の情報の開示状況を見ながら戦略的に用いられる。メイナード (1997) は、終助詞で使用頻度の高いものを計量して調べた結果、「ね」と「よ」が最も多いことを報告しているが、それでは、ASD 者ではどうなのだろう。本研究では、ASD 者と定型発達者の発話から、これらの交渉詞、「ね」と「よ」を計量し、両者の比較対照より、ASD 者の言語行動の特異性について言及する。

3. 方 法

(i) 被験者

16 歳から 27 歳までの ASD と診断された IQ 70¹⁾以上の 15 名と、同じく 10 代後半から 20 代前

半の定型発達者 15 名が被験者である。ASD 者の診断には、診断補助として、ADOS-2²⁾ (Autism Diagnostic Observation Schedule-2) が用いられている。

(ii) 手法

1 対 1 の面談形式で、被験者に面談者が 40 項目にわたる質問を行い、それに自由に答えてもらった。被験者の回答の中の敷衍に応じて、面談者は可能な限り、同じ質問事項でさらに掘り下げる質問を発展させるよう努めた。これによって、機械的な質問・応答ではなく、ちょうどサイコセラピーのように重要な情報を確保しながら、自然な対話の流れになるよう進められた。

録音データをトランスクリプトし、形態素解析にかけ、交渉詞の使用頻度を計量した。計量データを定型発達者・ASD 者それぞれ 2 グループ間に違いが見られるかどうかを見るために、独立したサンプルの t 検定にかけた。

4. 結果

ASD 者と定型発達者 2 グループ間で、交渉詞「ね」と「よ」の使用頻度において違いが見られ

表 3 独立サンプルの t 検定結果—「ね」の使用頻度

グループ統計量									
グループ	N	平均値	標準偏差	平均値の標準誤差					
ね ASD	15	5.8740	3.79410	.97963					
定型発達	15	21.5547	11.04174	2.85096					

独立サンプルの検定									
	等分散性のための Levene の検定		2 つの母平均の差の検定						
	F 値	有意確率	t 値	自由度	有意確率 (両側)	平均値の差	差の標準誤差	差の 95% 信頼区間	
								下限	上限
ね 等分散を仮定する。	8.575	.007	-5.202	28	.000	-15.68067	3.01458	-21.85575	-9.50558
等分散を仮定しない。			-5.202	17.261	.000	-15.68067	3.01458	-22.03357	-9.32777

表 4 独立サンプルの t 検定結果—「よ」の使用頻度

グループ統計量									
グループ	N	平均値	標準偏差	平均値の標準誤差					
よ ASD	15	1.0107	1.28677	.33224					
定型発達	15	2.0220	2.99699	.77382					

独立サンプルの検定									
	等分散性のための Levene の検定		2 つの母平均の差の検定						
	F 値	有意確率	t 値	自由度	有意確率 (両側)	平均値の差	差の標準誤差	差の 95% 信頼区間	
								下限	上限
よ 等分散を仮定する。	5.292	.029	-1.201	28	.240	-1.01133	.84213	-2.73636	.71369
等分散を仮定しない。			-1.201	18.992	.245	-1.01133	.84213	-2.77398	.75131

仮説検定の要約

	帰無仮説	テスト	有意確率:	決定
1	よの分布はグループのカテゴリで同じです。	独立サンプルによる Mann-Whitney の U の検定	.604	帰無仮説を採択します。

漸近的な有意確率が表示されます。有意水準は .05 です。

図1 ノンパラメトリック検定

るかどうかを検定するために、独立サンプルの t 検定を行った結果、「ね」に関しては、有意水準 1% で ($t=5.202$, $df=28$, $p<0.01$) ASD 者が定型発達者に比べて頻度が少ないことが検証された。また「よ」に関しては、定型発達者の方が平均値は高いものの、ノンパラメトリック検定より、等分散を仮定できず、帰無仮説が選択され、有意差は確認されなかった。表3と4及び図1は、これらの検定結果を示したものである。なお、頻度値は、各話者の総センテンス数に対する「ね」と「よ」それぞれの総頻度数の割合で計量された。

5. 考 察

5.1 「ね」と「よ」の言語機能

得られた計量結果と ASD 者の言語行動の傾向を関連づける前に、「ね」と「よ」それぞれの言語機能を、以下に示す。

5.1.1 交渉詞「ね」(加藤, 2016 a)

「ね」は「文が表す内容を、心内で確認しながら話し手の認識として聞き手に示す」機能を持ち、以下のような用法と機能がある(日本語記述文法研究会, 2009:40)。

(1) 聞き手の個人的な情報の確認

例 失礼ですが、秋山陽子さんでいらっしゃいますね。

(2) 話し手よりも聞き手に情報がある場合→不確かなことの決めつけの印象を与える。

例 彼の昇進、もうだめだね。

(3) のだ+ね→状況や相手の発言から引き出された話し手の考えの確認。

例 確かに彼、来るって言ったんだね。

(4) 内容が一般的な事象に「ね」がつくと、聞き手への確認要求のニュアンスが後退し、聞き手に話し手の認識を示すといったほどの意味になる。

例 五輪で東京も賑やかになりそうですね。

(5) 共通認識あるいは共感を示す。

例 A「冷えてきましたね」

B「そうですね」

これを神尾による情報構造の観点から見てみたい。神尾(1990:77)は「ね」を「現在の発話内容に関して、話し手の持っている情報と聞き手の持っている情報とが同一であることを示す必須の標識である」として、以下のように定義している。

「ね」は話し手の聞き手に対する〈饗応的態度〉を表す標識である。〈饗応的態度〉とは、与えられた情報に対して話し手が聞き手と同一の認知状態を持つことを積極的に求める態度である。そこで、必要要素としての「ね」の用法を規定する条件として、以下を設けている。

- (1) 話し手と聞き手とが既獲得情報として同一の情報を持っていると話し手が想定している場合、話し手の発話は「ね」を伴わねばならない。

さらに(1)が満たされない場合、以下(2)の条件が満たされれば、「ね」が任意要素として付与されるとしている。

- (2) 話し手が自己の発話により特に饗応的態度を表現したい場合、話し手の発話は「ね」を伴うことができる。

神尾(2002)もまた、基本的に「ね」が使われる状況は、(例1)のように、(1=) H>S (情報が聞き手のなわ張りに完全に入っている状態。H=hearer [聞き手], S=Speaker [話し手])であるとしている。

(例1)

T これは問題ありませんね。

しかし神尾は、(1=) H>S が当てはまらない用法があって、1つは、「ね」がないと不自然になるものと、なくても不自然ではないものとの2通りがあり、前者を「必須の『ね』」、後者を「任意の『ね』」として区別し、任意の「ね」は、ためらいや不確定性のような含みがある時に用いられるとしている。以下のように3つのタイプがあげられる。表5は、神尾の主張をまとめたものである。

- (1) 任意、強調の「ね」の例

例 来週、きっと行くでしょ、ねっ。→行くことを互に確信し合う

- (2) 任意、疑問の「ね」

例 a. 降りますかね。

b. あいつ、何て言ってきますかね。

- (3) 任意の「ね」

例 ちょっと、銀行まで行ってきますね。

随分、ひどい奴らしいね。(聞き手がこの情報を知らないことがわかっているにもかかわらず、知っているかのように話している)

表5 「ね」と情報構造

「ね」の用法	情報の縄張り関係
必須の「ね」	$H=1$ (Hの縄張りに入る)
任意、強調の「ね」	$H>n \& S>n$ (S・Hの両方の縄張りに入る)
任意、疑問の「ね」	$H>n \& S<n$ (SはHの縄張りに入ると「想定」)
任意の「ね」	$H \leq n \& S \geq H$ (Sの縄張りになく、Sの方がHより情報量が多いか同程度)

(神尾, 2002: 75)

仁田・益岡(1989)は終助詞「ね」の意味に言及して、「ね」は聞き手に情報が存在しているという以上に、聞き手に情報が存在すべきものとして仮定されていると述べている。そこでは聞き手にも話し手と情報を共有させようとする期待が大きく、聞き手に当該発話の内容に関する情報がすでに存在しているのと同様に、聞き手に理解、共感が可能だと仮定しての発話である。

伊豆原(1992: 162)は、話し手側から見た談話進行過程から、(1)話し手が談話を展開していく時、話し手の始めた話題を聞き手に持ちかけ、聞き手をその話題に引き込む、(2)話し手が聞き手の発話を受け、話題・情報を共有しようとしていることを表し、聞き手と一体化をはかろうとする、(3)話題や情報がすでに話し手と聞き手の間に共有されている時、同意や確認をしたり、同意や確認を求める、といった機能をあげている。

また単独の「ねえ」に関しては、「それまでの聞き手の理解を確認するとともに、聞き手を話し手のすすめる話の中に引き込もうとしている」としている(伊豆原, 1992: 163)。以下のような例である。

(例2)

T ねえ、こうしたらどうでしょう。(後略)

5.1.2 「ね」と「よ」の違い(加藤, 2016 a)

「ね」と並んで、「よ」も頻用される交渉詞である。「ね」と「よ」の違いは、「よ」が、聞き手が気づいていない事態に注意を向けさせる、あるいは聞き手が知っているべき情報を示し、注意を促す点である(日本語記述文法研究会, 2009: 242)。時枝(1951)は、対人関係の構築には、助詞と助動詞が重要な役割を果たすとし、中でも「ね」と「よ」がその主たるものであるとしている。例えば「ね」は、「聞き手を同調者としての関係に置こうとする主格的立場の表現」(時枝, 1951: 8)で、「よ」は、「聞き手に対して、話し手の意志や判断を強く押し付ける表現」(時枝, 1951: 8-9)であるとしている。北川(1984)は、「ね」は対人関係に関わる機能を持っていて、「発言が2人称事項に関することを表示」(1984: 34)するとし、「よ」は情報の内容の性格付けに関わる機能から、「発言が新事項に関するものであることを表示する」(1984: 35)ことを指摘している。

また、メイナード(1993: 106)は、話し手は自分が聞き手に比べてより詳しい情報を持っていると判断した時、情報自体に焦点を当てる「よ」を避けて「ね」を使うとし、関連情報の所有度を相対的に判断して終助詞「ね」と「よ」を使い分けしていると考えられるとしている。表6はメイナードが情報の所有度をまとめたものである。

表 6 情報 X の相対的所有度による終助詞「ね」と「よ」の使用

情報Xの相対的所有度	選ばれる助詞
話し手が独占、聞き手は情報なし	よ
聞き手が独占、話し手は情報なし	ね
話し手の情報量>聞き手の情報量	よ(ね)
聞き手の情報量>話し手の情報量	ね
話し手と聞き手の情報量が同じ位	ね

(メイナード, 1993: 106)

「よ」はまた、コンテキストによって、高所からものを言う、あるいは強圧的なニュアンスを伴い、聞き手に言い聞かせるという発話態度になる場合がある。その場合は、話し手の方が立場が上、あるいは知識が豊富であることを前提としている印象を与える。

「よ」と「ね」を組み合わせた「よね」は、聞き手にも受け入れられるものとして話し手の認識を聞き手に示すという伝達機能を持ち、①話し手・聞き手に共通する経験、聞き手にも受け入れられると見込まれる一般的な意見を表す文に付与して、話し手の認識として聞き手に示す、②聞き手に直接関わることや、聞き手の方が確かな情報を持っていると見込まれる事柄のように、話し手より聞き手の方が優位になる認識を示すことで確認を求める働きをする（日本語記述文法研究会, 2009: 266）。

(例 3)

①あの映画、よかったですね。

②S さん、確か去年、亡くなりましたよね。

5.1.3 ポライトネスの観点から見る「ね」（加藤, 2016 a）

5.1.1 及び 5.1.2 では、語彙機能の面から「ね」について述べたが、語用論の見地から、「ね」のポライトネスとしての働きに注目した研究に宇佐美（1999）がある。宇佐美（1999: 254）は「ね」のコミュニケーション機能として最も基本的なものとして、次の 5 点をあげている（但し、文末につく「ね」と問投助詞的用法のそれとは区別されていないことに注意）。

- (1) 会話促進：相手が概して自分と同じような考えを持っていると想定するため、積極的ポライトネスとなる³⁾。
- (2) 注意喚起：話し手が聞き手を自分の話題に引き込むために、自分の発話を強調したり、相手に注意喚起をする機能からは、会話促進機能も持っているが、同時に自分の発話維持の機能も持つため、話し手中心の用法である。よって、使用頻度が適切であれば問題ないが、度をこした用法は FTA⁴⁾となる。
- (3) 発話緩和：相手を配慮して発話を和らげるので、消極的ポライトネス⁵⁾となる。
- (4) 発話内容確認：話し手が自分の発話内容を確認する機能であるため、ニュートラルである。
- (5) 発話の埋め合わせ：常に「ですね」形をとり、注意喚起の「ね」を丁寧化したものであるため、消極的ポライトネスとなる。

1つの「ね」が上述5機能のうち、複数の機能を同時に果たしている場合も少なくない（宇佐美，1999）。

5.1.4 「のだ」+ね（加藤，2016 a）

「ね」はしばしば「のだ」と結びついて表現される。サイコセラピーのセッション（佐治，1985）から、以下に例をみてみたい。

（例 4）

[6] C 一生懸命何かをやるっていう気が全然しないんですね（ハアハア）。・・・どうでもいいっていう気になっちゃうんです。どうでもいいっていう気になって何かやればいいだろうって言われるんですけども（ウンウン），そんな気にとってもなれないんですね。じーっと・・・じーっとしているんじゃなくて，死ねちゃったら（pause 7）それが一番いいっていう感じなんです（ウン）・・・”）

（例 4）では、ほとんどの文に、「のだ+ね」（ん（の）ですね）の表現が用いられている。この場合の「ね」は、与えられた情報に関して話し手が聞き手と同一の認知状態を持つことを積極的に求める態度を示すものである（神尾，1990：77）。さらに披瀝性を示す「のだ」に「ね」が加わると、話の内容に抗せない雰囲気させられるような印象を与える。話し手以外知らない内容に関して認知を迫られるような押しつけがましい印象を与え、自分だけの納得を強要させるような感のある表現である。メイナード（1993：105）は、自分だけしか知らない情報とせず、相手にも確認してもらいたい気持ちを表現する資源であるとしている。また McGloin（1980）は、「のだ」は既知情報を示すため、聞き手にとって新情報であっても既知情報のように示されるので、聞き手を相互作用に引き込む働きがあるとしている。一方で、この「のだ」の頻発は臨床的観点からすると、話者の経験世界の解釈が固定化されていることを示す指標として注目される。話者独自の現実世界の解釈が前提化されているからである。よって定型発達者の場合であれば、対人的相互作用において、話者の内的世界の理解につながり、ASD 者対象のサイコセラピーであれば、この「のだ」をいかに解き開き、新しい視点を導入していくかが、セラピーの目的の一面として据えることができる。

一方で、国広（1984）は、この「のだ」が「です」と比べて柔らかく聞こえとし、「のだ」が「既成命題をあとの時点から振り返り、2時点の間にある関係があるものとしてとらえる」（国広，1984：6）ため、「のだ」を入れると、現在の状況のことではあるが、命題が過去に押しやられてそれだけ間接的になるからであるとしている。例えば、（例 4）を「のだ」表現抜きで言うと（例 5）のようになるが、（例 5）と比べて、確かに（例 4）が柔らかい印象を与えている。

（例 5）

C 一生懸命何かをやるっていう気が全然しないですね（ハアハア）。・・・どうでもいいっていう気になっちゃいます。どうでもいいっていう気になって何かやればいいだろうって言われますけれども（ウンウン），そんな気にとってもなれないですね。じーっと・・・じーっとしてなくて，死ねちゃったら（pause 7）それが一番いいっていう感じです（ウ

ン)・・・。”))

堀江 (2014: 43) は, 「のだ」を話し手と聞き手の間で連鎖的に用いることで, 両者の間に共通基盤を作り上げる働きを持つ場合があるとしているが, 以下のやり取りでは, クライアント・臨床家双方とも「のだ」を互いの発話に織り込むことで, 一種の連帯・共感基盤を積み上げる効果を発揮している。臨床家はそれまでのプロセスを踏まえて, 「こうなんだよね」と「のだ」を入れて, 前提とされた内容のように提示して, 押しつけがましさを緩和している。「のだ」をとった表現に変えてみるとその違いがわかる。

(例 6)

- [54] Y 自分の分んない。・・・分んないものと人の分んないものと, 分んないってひと言でついても, その内容が違うんだっていうような気がしてたんですね (ウーンウン)。自分が分んないのは全く分らないんで, 他の人は何かこの点分らないって, 何か疑問点がはっきりしてるんじゃない (ウーン) か。自分のはどうしようもない, 本当の無知の分らなさであって (ハアハア), そんな感じがしたんです (ウン)。
- [55] S 何か人が分んないっていっても, それは自分の分んない仕方と違うんで, 慰めに言われてるだけみたいな (ハイ), そんな感じもあったのね (ハイ), (後略)

↓

慰めに言われてるだけみたいな (ハイ), そんな感じもあったね

5.1.5 文末以外につく「ね」(加藤, 2016 a)

「ね」は, 文末以外にもつく。神尾 (1990: 61) は, 文末の「ね」以外は, 重要ではないとしているが, ここでは非文末につく「ね」についても触れておきたい。非文末の「ね」は, 発話の中で比較的自由的な位置に置かれ, 国語学では, 間投助詞的な働きをするものとして扱われてきている。特に次のような「ですね」形で臨床家の発話にもよく見られる。

(例 7)

- T それではですね, 今日はですね, B さんの一番, 心配だったことをですね, 話してもらえるといいですね。

富樫 (2000: 70) は, 非文末「ですね」の機能を, 以下のように, a) 検索処理をモニターする, b) 自分のターンが非円滑に展開する (している) ことを示し, 会話参与者に配慮する機能があるとしている。以下, 例である。

a) 検索処理をモニターする。

- T A さん, 何かですね, 今日はすごく, こう, すっきりとかですね, 吹っ切れたように見えますね。

b) 自分のターンが円滑に展開していないことを示し, 会話参与者に配慮する。

T じゃあ、あの一、あのですね。

T えーっとですね、

富樫（2000）は、非文末「ですね」の使用傾向として、先ず、「ですね」の前後に、「ええと」「あの一」といった「心内領域で検索処理を行なっていることをモニターする標識」（定延・田窪，1995）が出現する傾向があるとしている。同時に、これらの「モニター検索マーカー」自体に、「ですね」が付与される場合があるとする（「ええとですね」「あの一ですね」など）。この「ええとですね」がターンの冒頭に出現しやすい傾向を指摘し、この表現が、ターン処理に関わるのではないかと指摘する。また、非文末の「ですね」の後に、会話参加者のあいづちが生じやすいことを指摘している（富樫，2000：89）。

上述 a) と b) に述べた機能より、注目表示、あるいは聞き手の注意を促すという語用論的效果を意図して、以下のように注意を向けさせたい語彙の後に「ですね」を付与する場合もある。(3) は注目表示がない発話である。

(例 8)

- (1) その時にですね、どんな気持ちで、湧いてきましたか。
- (2) その時に、どんな気持ちがですね、湧いてきましたか。
- (3) その時に、どんな気持ちで、湧いてきましたか。

(1) (2) (3) の例に、ニュアンスの違いが認められる。それぞれ会話の焦点が異なることである。(1) では、「その時」が、(2) では、「どんな気持ち」が焦点化され、無標の (3) では、「湧いてきましたか」という述語部分が要点として伝わる。

その他、「～はですねえ」「～と言いますのはですね」「ところがですねえ」「ええとですねえ」「腹をたててみたりですねえ」「それはですねえ」など「です」「ます」体につく場合は、聞き手への持ちかけ意識が丁寧化とともに前面に出されることを示している（伊豆原，1992：164）。その他、接続助詞の前についた、「～大変なものなんですけどね」「～持ってたわけですからね」「～洗剤を入れますとね」や「～て形」についた、「～課長補佐がいましてね」など、「ね」不在でも可能だが、あれば、より「聞き手に発話がわたされたと感じられる傾向が強い」（伊豆原，1992：164）。

その他に丸山（2007：50）は、発話中に、直前に発話した情報を補足したり説明を加える必要があると判断した時に、別の発話を割り込ませる際に使われる「ですね」を指摘し、「挿入用法」としている。以下のような例である。

(例 9)

- C もっと時間があれば、そうですねえ、自分の気持ちの整理がつくまで、延ばせれば…(後略)

伊豆原（1992：163）は単独の「ねえ」を「それまでの聞き手の理解を確認するとともに、聞き手を話し手のすすめる話しの中に引き込もうとしている」としている。

本研究では、文末以外つく「ね」については、計量に入れられていない。

5.2 「ね」と「よ」の計量結果からみる ASD 者の言語行動の特徴

5.1 で述べた「ね」と「よ」の機能から総じて言えることは、話者は、聞き手も情報を受容しているか否かの見きわめを行って、それを言語表現で指標するということである。日本語の話し言葉で使用頻度の高いこの2つの交渉詞は、相手がある情報を持っているか否かを判断してはじめて、「よ」か「ね」が選択されるという使い分けのルールに基づいて選択される。つまり、日本語で話すことは、相手がある情報を知っているかについて判断することを強いられるということである(井出, 2006)。よって、ASD 者にこれらの交渉詞の使用が、定型発達者と比べて少ないことから、ASD 者に「ね」と「よ」が持つ機能認識が弱い、または、相互作用において、使用に供する動機付けがないか、あっても弱いということが言える。

交渉詞に限らず、ASD 者のコミュニケーションの取り方一般として、大井(2005, 2006)は ASD 者が、対人的相互作用において、「聞き手の役割を他者から割り付けられていることに気づかなかったり、聞き手の注意を確保することに無頓着であったりするもの、会話というものについての考え方が定型的会話者とは異なっていることの証拠かもしれない」と述べている。

生地(1997)は精神分析治療において、話が一方的で窮屈な感じがする場合、神経症や境界例の患者にはその印象を率直に伝えることが多いと言っている。「無理に会話を一緒に作り上げようとはしないが、会話が共同作業であるという実感がもてるかどうかは、その治療がうまくいっているかどうかの大切な指標である」と述べている。これなどは、「共話」が成り立たない相互作用を指すのであろうと思われる。「共話」というのは、水谷(1993:7)が、日本人の相互作用の特徴を説明するのに用いた概念である。例えば、「そろそろお暇しませんと……」と客が言っただけで、「なりませんので、失礼します……」と最後まで言わなくても、主人は、「まだ、いいじゃありませんか」と引き留める、あるいは、「このままではまずいと思ひまして、少し社内の改革を……」まで聞いて、それを引き取って、聞き手が「～しようと考えていらっしゃるわけで……」と完結するといった例をあげている。つまり話し手は、途中まで言って、次に何が来るかを聞き手に理解させ、文を聞き手に完結させるといったやり取りである(加藤, 2016a)。この「共話」が成り立たない相互作用は一般の会話でも見られる現象である。例えば、こちらが関係づけの言いさし文を発話しても、それに対する言語行動の反応が得られない場合、また相手が言い切りの文で会話を進める場合など、話者は話しにくさを感じる。ASD 者との面談で感じるのは、この種の話しにくさである(加藤, 2016)。

例えば、本研究でとりあげた「ね」と「よ」の使用が、ASD 者には限られていたり、あるいは、ASD 者の多くが最小限でかつ最終的な返答の仕方をするために、相互作用の発展性が削がれ、話しにくいと感じる。定型発達者の場合、1つの流れが他につながり、そこからさらに他へつながっていく。こうして対人間の意思疎通と相互作用の発展性が醸造されるが、ASD 者には言葉はあっても、彼らにとって言葉の存在理由が定型発達者のそれとはかけ離れたところにあるのである。

Frith(1989)は、ASD のコミュニケーションを説明するのに2種のコミュニケーションを想定している。1つは、情報を心の状態に関連させて、伝えられた情報を評価すること、2つ目は、むき出しのメッセージを伝達することだけに関わることで、定型発達者の場合は、前者が最優先されるが、ASD 者では後者が主になるとしている。さらに、聞き手はなぜ話し手がこの考え(別の考えでなく)を伝えたのかを理解することが必要で、一方、話し手は自分の意図を確実に理解される

ことが必要であること、つまり重要なのはメッセージにこめられた意図で、メッセージ自体ではないとする。そしてそのための言語的・非言語的表現手段を人々は持っている。

通常、話し手が心の状態を表に出すことで、むき出しのメッセージに異なる意味を与える。特に何等かの評価が加わった情報で、「こうすることによって、ほのめかしによる意図の曖昧さからそのものずばりのすっきりした明快さまで、様々な段階の理解を相手にさせることができる」(フリス:231)としている。このために対人的相互作用には、語彙の選択だけでなく、文法的資源を駆使した重層的な表現がなされる。例えば日本語では、「ね」と「よ」などの交渉詞の例に見られるように、むき出しのメッセージを包み込む表現が豊富である。さらに非言語的表現手段も付随的に動員される。しかし ASD 者にはこれらのコミュニケーション手段が修得されないのである。その原因の根底にあるのは、こころの理論の欠損であることが、様々な研究から指摘されている。

5.2.1 「こころの理論」及び「共同注意の欠損」からみるコミュニケーション

冒頭で述べた DSM 5 による ASD の診断基準のうち、(1) が示す 3 点、(i) 社会的、情緒的な相互関係の障害、(ii) 非言語的コミュニケーションの障害、(iii) 関係性の発達・維持の障害に共通して言える欠損資質の 1 つは、他者理解と共感性を備えていない点である。このうち他者理解、つまり他者の心的状態を推論する能力のアセスメントは、「心の理論 (Theory of Mind)」⁶⁾として研究されてきている。

かつて自閉症の第 1 次障害として、認知・言語の障害を柱とする「認知障害説」が有力視されてきたが、高い認知・言語能力を持った高機能の自閉症者の存在が認められるようになって、かつての説では説明できなくなった。そこで Baron-Cohen et al. (1985) の「心の理論 (Theory of Mind)」欠損仮説が注目される。この仮説を提示するために、Baron-Cohen et al. は誤信念課題 (False-belief task)⁷⁾を用いて、自閉症児・定型発達児・知能に遅れのあるダウン症児を対象に実験を行った。結果、定型発達児とダウン症児がほとんど正答したのに対して、ASD 者では 20% しか正答しなかった。このことからこの課題を通過できない高機能自閉症者は、「心の理論」の仕組みが欠損しているとしたのである。これは、この分野では長く支配的な説となってきた (加藤, 2017)。

この ASD 者の「心の理論」の欠損仮説は同時に ASD 者の共感心の低さを説明する。共感心の欠如ないし低さは、ASD 者の中心的な特徴の 1 つである。例えば、ASD のアセスメントの金字塔とされる ADOS (Autism Diagnostic Observation Schedule) には、“Comments on Other’s Emotions/Empathy” など、共感心を観察する項目が含まれている。共感心は、認知的共感 (cognitive empathy) と情動的共感 (emotional empathy) の 2 つに分けて研究されてきている (浅田・熊谷, 2015)。前者は他者の心的状態の推論で、身体的反応を前提としないが、後者は他者の心の状態を、頭の中だけでなく身体反応を伴って理解することで、他者の感情状態に同期することである。ASD 者は他者の心的状態の推論の能力が低いために認知的共感度が低く、付随的に情動的共感に伴う身体的反応も得られないという傾向があるとされる (加藤, 2017)。

よって、常に聞き手にある情報量を付度し、話し手の情報・考えを確認して、饗応的態度を言語に明示しながら対話を進めるという言語行動は、他者理解・共感の欠損する ASD には、備わるはずのない資質となる。この欠損が、聞き手へのポライトネスの配慮、共話的相互作用を生まない原因となるのである。

ここで、宇佐美がポライトネスの観点から指摘する「ね」の注意喚起を考えてみたい。

注意喚起は、共同注意の欠損に関連する事象と考えられる。共同注意 (joint attention) とは、他者の注意の対象を理解し、それを共有したり自分の注意の対象を他者に理解させて、それを他者に共有してもらう行動である。これは生後9か月頃から出現すると考えられ、それは一緒にいる大人に乳児が見てほしいものを指差す (指さし行動)、大人がある対象物を見てそれを乳児も見ると (視線追従)、乳児がある対象に対する評価を大人の表情などを見ることで参考にする (社会的参照) などの行動に見られる。

Baron-Cohen (1995) は、共同注意を「心の理論」に関連付けて捉えている。メカニズムは、共同注意が可能になるためには、他者の意図と視線検出が必要で、これが「心の理論」の基となる心を読むシステム (他者理解) で、このことが可能になって初めて、後の心の理論 (他者理解) が達成されるとする。Mundy et al. (1990) や Loveland and Landry (1986) も共同注意と言語発達との間に関連があることを指摘している。

Tager-Flusberg (1992, 1993, 1994, 1990) は、Baron-Cohen のこの位置づけを、言語使用面から検証し、共同注意の欠損という前言語期の問題にまでさかのぼって、ASD の語用障害を説明している。これが成長とともに言語表現手段を獲得して、対人的コミュニケーションを始めるようになると、ASD 児は、「コミュニケーションや言語が、情報や知識の交換のために存在しているとする理解が根本的に欠損していることが明らかになる」としている (Tager-Flusberg, 1993 : 215)。

「ね」の使用は、共同注意が言語化されたものと考えられる。注意喚起としての機能は、「よ」の方が強い。伊豆原 (2001) は、「よ」に関して、話し手の発話が一方的に聞き手に伝えられ、変化や行動を促そうとする表現であるとし、曹 (2000) は、注意喚起の表現であるとする。白川 (1992) は、「よ」には、付加される文の発話が聞き手に向けられていることを強く表明する機能があることを指摘している。このことは、「よ」が付加された時、聞き手への語りかけ度が高まることを意味している (今村, 2011)。この意味では、「ね」も語りかけ度を高める機能もっているが、むしろ「語りかけ度」というよりも、命題の確認・同調要求であるので、「交渉度」と捉えるべきである。言い換えれば、「よ」は聞き手への一方的な命題提示である分、聞き手への響応度は低くなる。一方、「ね」は、他者に共感・理解を求めることが前提とされるため、より響応的である。ポライトネスの観点からも、5.1.3 で述べたように、「ね」に関しては、積極的・消極的ポライトネスの機能を持ち、使用頻度の度を越さない限り、FTA とはならない。しかし、「よ」は、一方的な命題の提示で、「交渉度」が低くなるため、FTA が生じるのである。

「よ」に関しては、計量データにおいて、両者に有意差は確認されなかったが、平均値において定型発達者に「よ」の使用頻度が高く出ている。

大井 (2005) は、20 代の ASD 者の発話に、些細なことについても交渉できない、率直すぎる物言い、ターンの独占、唐突な話題転換、相手を不快にする言葉遣い、非言語的要素の問題、相手の言葉の意味の推論ができないこと、冗談・比喩・反語の理解困難を指摘し、これらの能力に改善を見込めないわけではないが、「克服されがたい問題」が残るとしている (大井, 2006)。Volkmar and Klin (1993) もまた、社会的スキルは ASD 児が成人期に至るまで発達していくが、高機能 ASD 児であっても、かなり障害を残したままであることを指摘している。Tager-Flusberg (1993) は、ASD 者は、定型発達者と比べると発達は遅れるが、年齢を経ると心の理論についての知識を獲得することができるとするが、本研究でとりあげた言語獲得臨界期をとくに過ぎた成人期の

ASD 者の交渉詞「ね」と「よ」の使用を見る限り、「克服されがたい問題」が残ることが窺える。「ね」と「よ」の使用について、その根底に共同注意の問題があり、それが「克服されがたい問題」として、思春期・青年期まで持ち越されていると考えられるのである。

5.2.2 その他の要因説

ASD 者に生じる語用障害の要因として、5.2.1 で述べたように、「心の理論」欠損説が最もよく引き合いに出されるが、その他に中枢的統合の障害、実行機能の障害、そして全般的な記号論の欠陥などが議論されるが（大井、2006）、ここでは特に中枢的統合の障害に注目したい。

杉山（2004）は、ASD 者が会話を苦手する理由に、対人的相互作用には多数の情報が集合することを理由としてあげる。顔の表情のような刻一刻と変わる対象は、ASD 者の情報処理能力をややすと越えてしまうとしている。例えば、人を見た時に、定型発達者はそこから表情を読み取るが、ASD 者では、着衣の一部、あるいは顔の一部にのみ注意が集中してしまうという特性がある。つまり、全体像の認知が困難なのだが、特に重要な点として、「認知表象との心理的な距離の欠如がもたらされる」（2004：18）ことを杉山は指摘する。こうした認知傾向が、「個別的具体的な事物へのとらわれや、汎用性の欠如」（2004：18）をもたらすという認知全体の独自さを基盤として語用障害が引き起こされるとする。

こうした中枢的統合の弱さが原因となって、言葉の解釈やコンテキスト情報の取り込みができないために、聞き手の情報量をはかって使用する「ね」などの使用が乏しくなるのは必然である。聞き手の情報量・知識状態に関する理解と斟酌に必要な聞き手の身振り・表情などの非言語的フィードバックの理解力が、中枢的統合が弱いために、機能不全を起こすからである。

6. 包括的な視点から

SFL は言語を意味あるいは意味の可能性のシステムとして捉える（Halliday, 1978）。機能的見地からすると、意味のシステム（すなわち言語）は、話し手がことを行う資源である。SFL では言語を話し手が言語資源の中から選択して行う意味を作り出すシステムとして捉えるところに、従来の形式文法との違いが見られる。

このようにある意味を示したい場合に、いくつか選択肢があり、人は発話の瞬時に、言語資源の選択網から選択していくわけであるが、SFL では、これを選択体系網（choice system）とし、理論の中核としている。つまり選択体系とは、交替可能ないくつかの選択網の中から、いずれかを選んで言語表現が形成されるわけで、その選択項の集合のことを言う。なぜ、他の選択肢ではなく、この選択肢が選ばれるのか。それは、それぞれの表現の機能を考えた上で、社会的目的達成のための言語ストラテジー上、意図的に選ばれているのである。このようにある意味を示したい場合に、いくつか選択肢があり、人は発話の瞬時に、それぞれ語彙－文法層と音韻層において選択を行っている。そして選択には、必ず発話意図が介在する。その発話意図がそもそも ASD 者の場合、定型発達者とは異質の形成をたどる。こうして話者のとる選択をマッピングしていくと、そこに話者の対話ストラテジー、あるいは支配的な文法資源選択の構造が見えてくる。それが ASD 者の発話であれば、本研究で示された対人的無関心、現実世界の認知の偏りを読み取ることが可能である。

本研究では、交渉詞から、「ね」と「よ」と取り上げ、これらの文法資源が、定型発達者と比較

して、ASD 者の選択の網にかからない資源であることがわかった。そこでなぜ、これらの選択肢が ASD 者にとって選択されない傾向にあるのかを考察し、そこに ASD の「こころの理論」の欠損からくる共同注意の欠損が底流することを導き出した。

本研究で得られた結果を、さらに大きなデータで再検証することを今後の課題としたい。また、機能を細分化した「ね」と「よ」及びその他の交渉詞を含めた計量データを統計値化して、ASD 者の言語行動の予測選択網の綿密なマッピングをはかりたい。

本研究は「心の理論」形成時期を過ぎた 10 代後半から 20 代前半にかけての ASD 者を対象に、先行研究で指摘されてきた ASD 者の共感の低さを、言語面の観察から支持したものである。この年代の ASD 者の中心課題は、対人関係上の困難への対処である。対人関係は人間が社会で生存していく上で、逃れることのできない要素である。こうした言語面からの研究は、ASD 者の社会コミュニケーションを困難にする原因を究明するところに意義が見出せる。原因がわかれば、それに沿った対策を講じることができるからである。さらに検証方法の網を緻密なものとしていきたい。

謝辞

本研究は、科学研究費補助金（26284060、代表：加藤澄）の助成を受けたものである。

注

- 1) 自閉症スペクトラム障害の中でも、IQ 70 以上あれば高機能で、知的障害と言葉の遅れがなければアスペルガーである。両者の違いは、前者に言語の遅れが見られる点である。しかし、この差異は、時間の経過とともに解消していく。情緒的に問題があったり、あるいは対人関係に困難をきたすという点は両者とも共通している。
- 2) 自閉症スペクトラム診断の金字塔とされる診断補助ツールで、臨床用使用と研究用使用の資格があり、研究使用の資格を取得しなければ、研究論文等で ADOS を使用して得たデータを用いることは許されない。筆者加藤は、両者の資格を取得している。
- 3) 話し手が聞き手と同じものを求め、感じ、あるいは共通の特性、つながり、地位、責任などを持っていることを示すことによって、聞き手に対する肯定的な自己イメージを植えつける言語行動である。
- 4) Face Threatening Act のことで、フェイスにとって脅威となる言語行動である。
- 5) 妨害されることのない行動の自由と、妨害されないようにしてもらふ配慮の要求のことを言う。話し手が聞き手に不便な思いをかけることを避けるために、聞き手の消極的フェイスを満足させる言語行動である。
- 6) 他者の感情・想望など心の状態を予測・推測することで、この能力は、発達心理学で、人間の発達のある時点で獲得され、一般に 4 歳頃とされている。一方で、この能力が人間に生まれつき備わっているとする生得論もある。
- 7) 「心の理論」の発達を査定するために作られた一連のテストである。例えば、サリーとアンと名付けた人形を用い、サリーにはかご、アンには箱を持たせる。サリーは自分が持っていたビー玉を自分のかごに入れて、自分は外出してしまう。アンはサリーがいない間にサリーのかごからビー玉を取り出して自分の箱に入れる。そこでサリーが戻ってくるとビー玉で遊ぼうとする。課題は、サリーがビー玉を探すのはどこか、というものである。このテストは、ある事象を見た人と見ていない人との差異を認識できるかどうかを問うものである。正解は「かごの中」であるが、自閉症児は、サリーの立場になって考えるということができずに、「箱の中」（誤答）と答えるケースが多い。

参考文献

- 浅田晃佑・熊谷智一郎. 2015. 「発達障害と共感性－自閉症スペクトラム症を中心とした研究動向」『心理学評論』Vol.58(3). 379-388.
- Baron-Cohen, S., Leslie A. M., and Frith, U. 1985. "Does the autistic child have a 'theory of mind'?" *Cognition*, 21, 37-46.

- Baron-Cohen, S. 1995. *Mindblindness: An essay on autism and theory of mind* Cambridge, MA: MIT Press.
- Frith, U. 1989. *AUTISM: Explaining the Enigma*. UK. Basil Blackwell Ltd. (富田真紀・清水康夫訳. 1991. 『自閉症の謎を解き明かす』東京: 東京書籍)
- Halliday, M. A. K. 1978. *Language as a Social Semiotic*. London: Edward Arnold.
- 堀江薫. 2014. 「文末名詞化構文の相互行為機能」井出祥子・藤井洋子編. 『解放的語用論への挑戦－文化・インターアクション・言語』東京: くろしお出版.
- 井出祥子. 2006. 『わきまの語用論』東京: 大修館書店.
- 今村和宏. 2011. 「終助詞『よ』『ね』の『語りかけタイプ』と体の動き」『言語文化』48: 37-51.
- 伊豆原英子. 1992. 「『ね』のコミュニケーション機能」『日本語研究と日本語教育』159-172. 名古屋大学出版会.
- 伊豆原英子. 2001. 「終助詞「よ」「よね」「ね」再考」『愛知学院大学教養部紀要』第51巻第2号
- 神尾昭雄. 1990. 『情報のなわ張り理論』東京: 大修館書店
- 神尾昭雄. 2002. 『続・情報のなわ張り理論』東京: 大修館書店.
- 加藤澄. 2016 a. 『サイコセラピー臨床言語論－言語研究の方法論と臨床家の言語トレーニングのために』東京: 明石書店.
- 加藤澄. 2016 b. 「テキスト分析の中で対人的言語資源を考える」『機能文法による日本語モダリティ研究』東京: くろしお出版.
- 加藤澄. 2017. 「自閉症スペクトラム障害者の物語絵本のナラティブから検証する認知的共感の欠損」『機能言語学研究』第9号.
- 北川千里. 1984. 「発言の階層構造と『ことば』の主体性」『日本語学』4, 8, 31-42.
- 国広哲也. 1984. 「『のだ』の意義素覚え書」『東京大学言語学論集』84: 5-9.
- Loveland, K. A., and Landry, S. H. 1986. "Joint attention and language in autism and developmental language delay." *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 16(3), 335-349.
- 丸山岳彦. 2007. 「デスネ考」『時間の中の文と発話』東京: ひつじ書房.
- メイナード・泉子・K. 1993. 『会話分析』東京: くろしお出版.
- メイナード・泉子・K. 1997. 『談話分析の可能性』東京: くろしお出版.
- McGloin, H. Naomi. 1980. "Some observations concerning no desu expressions." *The Journal of the Association of Teachers of Japanese*, 15, 117-49.
- 水谷信子. 1993. 「『共話』から『対話』へ」『日本語学』12: 4-10.
- 森則夫・杉山登志郎・岩田泰秀. 2014. 『臨床家のための DSM-5 虎の巻』東京: 日本評論社.
- Mundy, P., Sigman, M., and Kasari, C. 1990. "A longitudinal study of joint attention and language development in autistic children." *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 20, 115-23.
- 日本記述文法研究会. 2009. 『現代日本語文法 7』東京: くろしお出版.
- 仁田義雄・益岡隆志. 1989. 『日本語のモダリティ』東京: くろしお出版.
- 大井学. 2005. 「青年期のグループ活動がもつ意味－仲間がいて成長がある」杉山登志郎(編). 『アスペルガー症候群と高機能自閉症－青年期の社会性のために』東京: 学習研究社. 168-173.
- 大井学. 2006. 「高機能広汎性発達障害にともなう語用障害: 特徴, 背景, 支援」『コミュニケーション障害学』23: 87-104.
- 生地新. 1997. 「精神療法における『自分』について」北山修編. 『日本語臨床 2「自分」と「自分」がない』東京: 星和書店.
- 定延利之・田窪行則. 1995. 「談話における心的操作モニター機構－心的操作標識「ええと」「あの(ー)」」『言語研究』No.108.
- 佐治守夫. 1985: 『治療的面接の実際／ゆう子のケース』日本・精神技術研究所.
- 白川博之. 1992. 「終助詞「よ」の機能」『日本語教育』77号.
- 曹再京. 2000. 「終助詞「よ」の機能」『言語科学論集』第4号, 東北大学文学部.
- 杉山登志郎. 2004. 「コミュニケーション障害としての自閉症」『自閉症と発達障害研究の進歩』Vol.8. 東京: 星和書店.
- Tager-Flusberg, H., Calkins, S., Nolin, T., Baumberger, T., Anderson, M., and Chadwick-Dias, A. 1990. "A longitudinal study of language acquisition in autistic and Down syndrome children." *Journal of Autism and Developmental Disorder*, 20, 1-21.

- Tager-Flusberg, H. 1992. "Autistic children's talk about psychological states : Deficits in the early acquisition of a theory of mind." *Child Development*, 63, 161-172.
- Tager-Flusberg, H. 1993. "What language reveals about the understanding of minds in children with autism." In Simon Baron-Cohen and Helen Tager-Flusberg (eds.). *Understanding Other Mind*. 138-157.
- Tager-Flusberg, H. 1994. "Dissociations in form and function in the acquisition of language by autistic children." *Constraints on language acquisition : Studies of atypical children*. Hillsdale : Lawrence Erlbaum Associates. 175-194.
- Tager-Flusberg, 1995. "'Once upon a ribbit' : stories narrated by autistic children." *British Journal of Developmental Psychology*, 13, 45-59
- Teruya, K. 2006. *A Systemic Functional Grammar of Japanese*. Vol.2. N.Y. : Continuum.
- Teruya, K. 2007. *A Systemic Functional Grammar of Japanese*, Vol.1. N.Y. : Continuum.
- 富樫純一. 2000. 「非文末『ですね』の談話語用論的機能－心内の情報処理の観点から」『筑波日本語研究』第5号.
- 時枝誠記. 1951. 「対人関係を構成する助詞・助動詞」『国語国文』20, 9, 1-10.
- Volkmar, F. R. and Klin, A. 1993. "Social development in autism : historical and clinical perspectives". In Simon Baron-Cohen and Helen Tager-Flusberg (ed.). *Understanding Other Mind*. 40-55.
- 綿巻徹. 1997. 「自閉症児における共感獲得表現助詞「ね」の使用の欠如：事例研究」『発達障害研究』19(2). 146-157.
- 宇佐美まゆみ. 1999. 「『ね』のコミュニケーション機能とディスコース・ポライトネス」現代日本語研究会編『女性のことは・職場編』241-268. 東京：ひつじ書房.